

郷土資料館だより

Vol.46 No.3
2024.3.15

パネル展「三島の村々―旧村の歴史―」開催中！

- 期 令和6年3月9日(土)～5月12日(日)
- 場 郷土資料館 1階企画展示室

江戸時代の三島市域は、1つの宿場町と、その周辺に広がる32の村々に分かれていました。

明治22年(1889)、市制・町村制の施行に連動し、「明治の大合併」と呼ばれる大規模な合併が全国各地で進むと、現市域においても5ヶ村を合併した「北上村」、10ヶ村を合併した「錦田村」、16ヶ村を合併した「中郷村」が誕生し、三島宿も「三島町」に改められました(三嶋大社の社家村は、これに先立ち明治10年に三島宿へ組み込まれる)。

この1町3村の合併が進むのは、昭和に入って以後のことで、昭和10年(1935)に三島町と北上村が合併し、同16年に三島町と錦田村が合併して「三島市」が誕生します。戦後、昭和29年に至って三島市と中郷村の合併が遂げられ、現在の三島市域が成立するに至りました。

明治の大合併以前、三島宿周辺に存在していた村々の名は、3村が成立した後も字名となって各地域に残ることとなりました(社家村・堀之内村は名称消滅)。本パネル展は、北上・錦田・中郷地区に見られる31の字(旧村)について、その歴史や地名の由来をパネルでご紹介するものです。



次回企画展 令和6年6月29日(土)～9月29日(日)

新規収蔵品展開催のご案内

令和3～5年度に郷土資料館が購入および寄贈を受けた資料を紹介します。米屋の計量道具や洋装店にディスプレイされていた子供服、西幼稚園(令和2年度閉園)で使われていたパペット、細井繁誠画伯の油彩画《南京》など貴重な資料が新たに収蔵されました。

三島の歴史と文化の多様性を語る品々は一見の価値があります。



「いろはかるた」昭和23～24年頃、文 大岡博、絵 細井繁誠

伊豆史談会 寄附金受納式の様子

令和5年11月30日(木)、伊豆史談会様(会長 土屋比都司氏)から郷土資料館の事業充実のため、11万595円のご寄附をいただきました。

伊豆史談会様は昭和5年、郷土史家戸羽山瀚氏により結成された研究会で、三島を中心とする伊豆地域の歴史について研究を重ね、雑誌『伊豆史談』を刊行するなど、長年にわたり郷土史の解明・普及に貢献されてきました(令和4年5月活動終了)。

郷土資料館では、いただいたご寄附を有効に活用させていただくとともに、これまでの会の活動成果を引き続き館事業へと活かしてまいります。



左から伊豆史談会副会長関守敏氏、小塚教育長、伊豆史談会理事藤池都子氏・同福田淑子氏

企画展「三島宿へようこそ」報告

●開催期間 令和5年10月28日(土)～令和6年2月18日(日)

●展示資料数 96点 ●入場者数 16,411人

本企画展は三島宿の全体像を紹介するもので、館蔵資料のほか、絵図類などの借用資料もあわせ、三島宿の歴史、町並みの様子、宿場の役割、災害、終焉まで幅広くご覧いただきました。特に郵政博物館所蔵の「東海道分間延絵図控」巻二・巻三は、道中奉行所で作られた3セットの「五海道其他分間延絵図並見取絵図」のうちのひとつで、道中奉行所に置かれ実務に使用されたと推測されるものです。街道沿いの様子が大変細かく描かれており、来館者の注目を集めました(原本の展示は10月31日～11月26日まで。それ以外の期間はパネル展示)。

来館者は、展示資料をひとつずつ丁寧に見学している方が多く、三島宿への関心の高さがうかがえました。



●関連事業

①展示解説 令和5年11月18日(土)、令和6年1月27日(土) 各日11:00～/13:30～

参加人数：合計23名

②講演会「宿場世界の個性と多様性—三島宿と神奈川宿の絵画資料の比較から—」

開催日：令和5年11月23日(木祝)

会場：三島市民生涯学習センター3階講義室

講師：井上 攻おさむ氏(元横浜市歴史博物館副館長)

参加者数：57人



神奈川宿について研究されてきた井上攻氏をお招きし、三島宿と神奈川宿を例に、それぞれのまちの個性について、絵図や浮世絵、名物の番付表など、多くの図版を用いてお話いただきました。

参加者からは、比較してみることで発見がたくさんあった、絵画資料から歴史を読み解く面白さを認識した、当時の浮世絵や絵図で描かれる「三島のアイコン」は大社の鳥居と新町橋というのが新鮮だった、等の意見が聞かれ、新しい視点から三島宿を理解する一助としていただけただようでした。

郷土資料館運営協議会委員改選のお知らせ

郷土資料館には館の円滑な運営を図るため、郷土資料館運営協議会が設けられています。令和5年度第2回郷土資料館運営協議会(令和6年2月9日開催)では、任期(2年)満了に伴う委員の改選を受け、10人の委員に対し委嘱状交付が行われました。委員の方々には今後2年間、郷土資料館の運営等について意見や助言をいただき、それらの意見を参考にしながら館の資質向上に努めてまいります。



委員長	加藤雅功
副委員長	増島 淳
委員	奥村徹也、橋本敬之、坪井則子、齋藤幸蔵、大村朱実、西島真美、小藪余志美、池谷初恵(順不同・敬称略)

任期 令和5年12月10日～令和7年12月9日

三嶋大社の古文書をよむ 第20回

◆足利義詮の御判御教書から 御師職を命ぜられた文書

南北朝時代、室町幕府第二代将軍、足利義詮の古文書です。古文書学の呼び名では室町将軍足利義詮御判御教書と称します。室町将軍家の御判御教書はこれまでもとりあげましたが(第4回・5回参照)、少し文書の形式について説明しておきましょう。

以前古文書を大きく区分する場合は、奉書形式と直状形式に分けられると説明しましたが(第15回)、御教書は本来、上位者の命令や意をうけたまわって配下のものが発する奉書形式の文書につけられる名称です。奉書形式の文書は、天皇の命ならば綸旨、上皇ならば院宣、親王ならば令旨、三位以上の者ならば御教書、それより身分が下ならば奉書と呼ばれます。

しかしこの文書は将軍義詮が直接発する直状です。義詮だけでなく足利尊氏以降、室町将軍やそれに準ずる直義が直々に発した直状形式の通達文書は、当時から御教書と呼び習わしています。本来の奉書の意味が失われた用法です。こういうところが古文書名のわかりにくい点ですが、彼らだけの特別な文書だとすれば覚え易いでしょうか。普通の御教書と区別するため、将軍が自ら署判した(花押を記した)御教書という意味で、将軍誰々の御判御教書と称します。

では文書の内容です。「伊豆国の三嶋宮御師職のことにつき、仰せ付けます。殊に天下安全、武運長久の祈禱を念を入れ行うように」と書かれています。三嶋大社の正神主を御師職とし、祈禱を念入りに行うよう命じています。

御師(おし/おんし)とは、御祈禱師を略した言葉とされ、寺院や神社に付属し、檀那と呼ばれる信者たちの祈禱の代理や、参詣の案内をする者を指しました。多くは一般民衆と参詣施設との仲介者として存在し、江戸時代末まで各地の寺院神社でみられました。ただしこの文書での御師とは、一般民衆に対する御師ではありません。将軍が直々に職務を命じていますから、将軍家のための祈禱を行う者、将軍家御祈禱職というべき職分です。

殊に動乱期の南北朝時代は、足利尊氏らが各地の神社などに武運などを祈る文書を多く届けています。こうした行動は、信仰の表明であると同時に、その地域の支配や勢力の誇示でもあったのでしょう。その延長で、将軍家・足利家の御師職という役割が、各地の有力神社などに与えられたのでしょう。京都や近畿地域では、すでに平安時代末から鎌倉時代にかけて、支配層の貴族や武士などの御祈禱を受け持つ人物が、有力な寺院や神社に散見されます。室町将軍家でも御師職という職分を定め、担わせました。

なお三嶋大社内では、この御師職の継承をめぐり多少の対立がありました。三嶋大社文書では御師職に言及した文書が、今回の貞治6年(1367)の文書以後20年ほどの間に4点みられるのですが(文末の一覧の通り)、このうち③では神主家分流の西大夫家が御師職獲得を狙い活動していたことがわかります。将軍家の祈禱師を担う役目がいかに重視されていたかがわかります。

先に北条時政の文書の解説で(第13回)、神主家が東大夫家と西大夫家に分派していて、やはり西大夫家が東大夫家の権益を侵犯する行為があったことにふれましたが、こうした行為はことある毎に繰り返されたのでしょう。また、古文書の宛名は正神主となっていますが、これは神主東大夫家のことであり、西大夫家に対する東大夫家の優位を示すものです。神主家が分立した三嶋大社ならではの事情によるものです。

■三嶋大社文書にのこる御師職に関わる文書

- ①貞治6年(1367/正平22)7月20日 室町将軍足利義詮御判御教書 当宮正神主宛(写真)
- ②応安6年(1373/文中2)卯月16日 管領細川頼之奉書 正神主長門守宛
- ③永和元年(1375/天授元)9月4日 管領細川頼之奉書 上杉能憲宛
- ④至徳4年(1387、8/23嘉慶改元/元中4)10月10日 関東管領上杉憲方奉書 三嶋宮正神主宛

(郷土資料館運営協議会委員・奥村徹也/三嶋大社宝物館 学芸員)



貞治6年(1367/正平22)7月20日 室町将軍足利義詮御判御教書

豆州三嶋宮御師職事、仰せ付けらるる所なり。殊に天下安全、武運長久懇祈禱んずべきの状、件の如し。

貞治六年七月廿日 (花押)

當宮正神主殿

三島の歴史とジオポイント・29

—— 水の苑緑地公園 ——

源兵衛川の「飛び石」を南に下ると、終点は「下源兵衛川橋」です。橋の南側に「水の苑緑地公園」（南本町、緑町、南町地内）があります。公園のジオと歴史を紹介します。

約1万年前、富士山から流下した「三島溶岩流」は、現在の三島駅から楽寿園付近で箱根山西麓の山脚に妨げられ、大量に堆積しました。その一部は現在の小浜池の下に伸びている山脚を乗り越え、水の苑緑地公園付近まで達しました（溶岩は地下十数mに数mの厚さで堆積しています）。園内には多数の湧水地点がありますが、この溶岩流末端部からの湧水でしょう。

約6～7千年前には、全世界的な温暖化で海面が上昇し（縄文海進）、田方平野全域が内湾（古狩野湾）となり、公園付近まで海が広がりました。

約5千年前（縄文時代中期）以降は気温が下がり海面も低下し、当地は狩野川や黄瀬川などが運ぶ土砂が堆積しました。

約2900年前、富士山の東斜面が大崩壊し、以後数百年間にわたり、巨大土石流（御殿場泥流）が裾野・三島・沼津を何回も埋め立て、現在の平坦な地形を作りました。園内には角の取れた玄武岩質の直径50cm～1mの大石が多数露出しています。これらは御殿場泥流起源です。

約700年前（室町時代）、地元の豪族「寺尾源兵衛」が小浜池の湧水を中郷地区に導くための農業用水路「源兵衛川」を掘削しました。川は公園までは直線状です。

公園より下流は蛇行が目立ちます。公園付近の湧水群を源とする自然河川があったようです。

掘削した用水堀と公園付近の自然河川を接続させて、源兵衛川が完成しました。

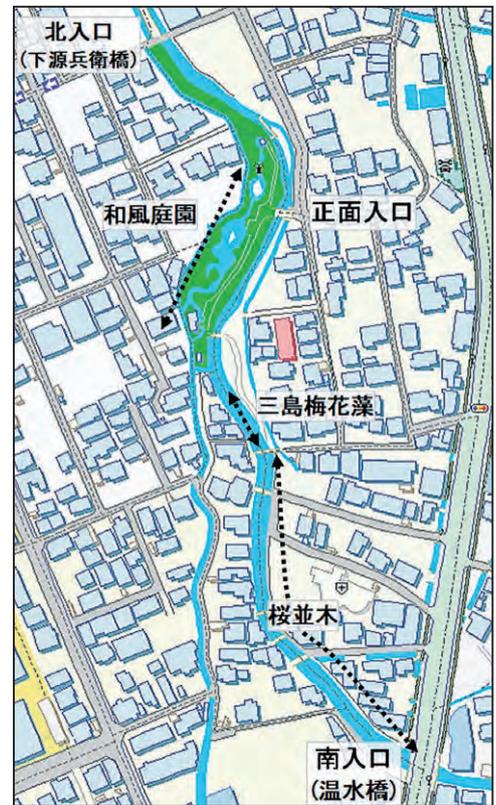
公園の中心部には「和風庭園」があります。終戦直後の食糧難の時期には「鯉の養殖池」でした。その後これを利用して日本料理店・吉野水苑が営業していましたが、1992年に三島市立公園となりました。

清流が流れる園内は樹木で囲まれ、住宅街とは隔離されています。季節によりカモ類・蛍・オハグロトンボ・カワセミなどに会えます。

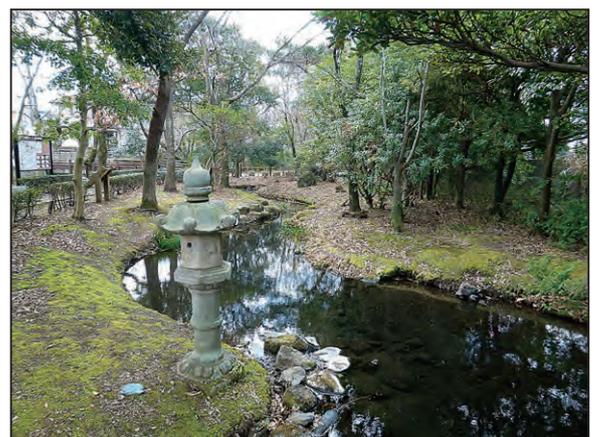
水中では三島梅花藻が白く清楚な花を咲かせます。

公園の下流部には川沿いに25本の桜並木があり、花びらが川面を彩りながら、流れる様子も美しいです。

四季を通じて色々な動植物を、ゆっくり観察できる「水の苑緑地公園」は、市内随一の公園だと私は思います。現在の環境を維持するために、市民有志のボランティア活動が日々行われていることを忘れてはいけません。



水の苑緑地公園の地図



園内の和風庭園

(郷土資料館運営協議会委員・増島淳)

向山古墳群 第16号墳 第5回

—— 古墳の規模と形状の推定 ——

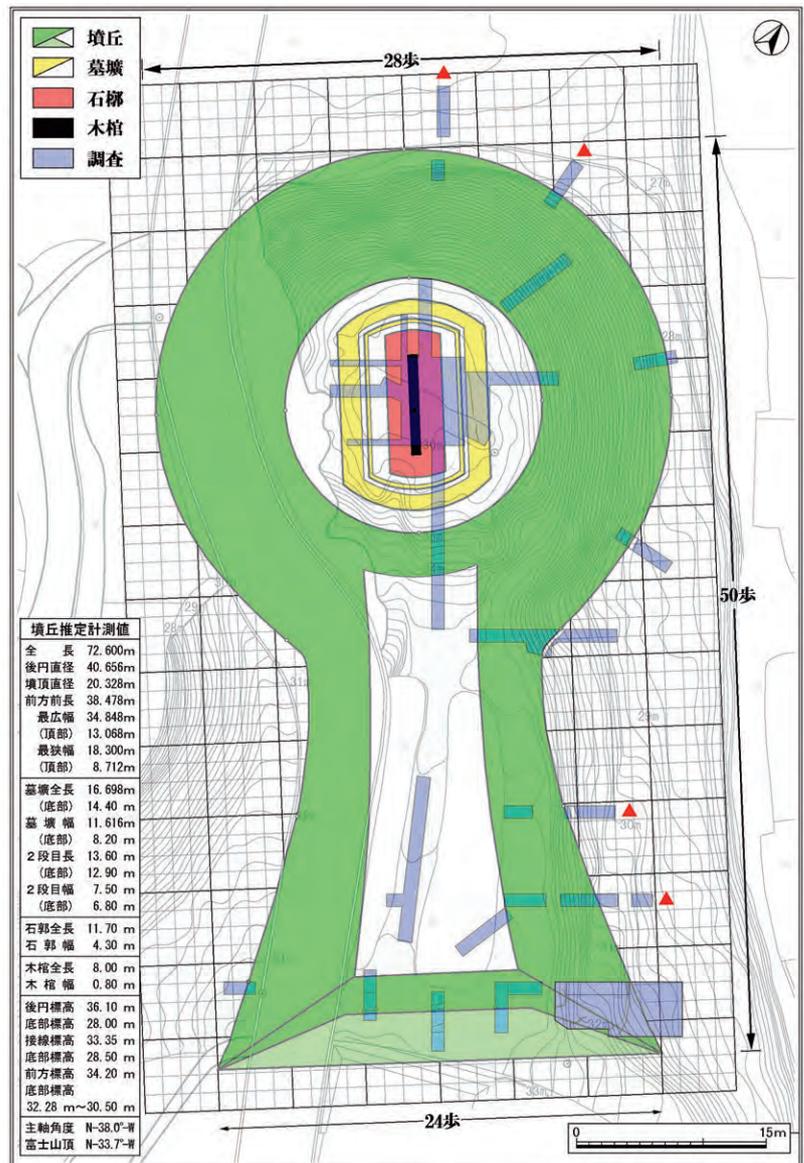
前回記述した「向山古墳群 第16号墳 第4回」の続きになりますので、所在地・時期及び墓壙と石槨・盛り土や遺物と年代観などの説明は、133～136号をお手元においてお読みください。

さて、向山16号墳の調査した溝は（薄青）で表現しておりますが、（赤▲）以外は明瞭な遺構ラインが断面の観察で確認できた場所になります。そのポイントを繋ぐと（緑）の墳丘ラインが現れてきます。調査量に比して確定部分が少ないので、本来点線で表現することが望ましいのですが、分かりやすく説明するために実線で表記し色分けを行いました。全長は約72.6m、後円部直径約40.7mの推計を基本とし、当時使われたと考えられる魏の単位「歩」（1歩=1.4472m）を利用すると、全長約50歩、後円部直径約28歩、前方部前面幅約24歩になります。

前方後円墳の形状は、言い古された形容ですが「鍵穴」の形をしています。でも発生期の前方後円墳は他と少し違う所が前方部に見られます。その形状は緩やかにカーブして「三味線の撥」のように広がります。この形の代表となるのは、奈良県桜井市の箸墓古墳が有名ですが、一説では「卑弥呼」の墓なのではないかと再び脚光を浴びています。調査は陵墓のため未確定ですが、全長約276m、後円部直径約156m、前方部前面幅約132mと見事な撥型前方後円墳です。向山はその約1/4スケールと考えられ、3世紀中、つまり箸墓造営後すぐに作られたと判断できます。

ヤマト王権が直接結びついた在地の勢力を従属させ、王権の勢力範囲を明確に示す象徴として、陸路交通の要衝地に造営したものです。また、大陸に対して国家体制の整備状況をアピールするための対外的な「モニュメント」にも利用したようです。古墳に葬られた人はヤマト王権を支える中央の有力者と考えられますが、後続する1～15号墳はその墓域を守ることが許された地域の支配者層と判断しています。

今回は最終回、「これからの向山古墳群」について記述します。



古墳の規模と形状の推定 (1/600)

郷土教室の報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。令和5年12月から令和6年2月までに行った事業をご紹介します。

日程	郷土教室	内容	参加者
12月 2日(土)	ワラ細工	ワラで亀をつくってみよう	13人
1月13日(土)	リリアン編み	干支のタツの編みぐるみをつくろう	10人
2月 3日(土)	楽寿園の自然	富士山の溶岩観察&環境カルタであそぼう	33人



12月2日ワラ細工



出来上がったワラ細工の亀



1月13日リリアン編み



2月3日楽寿園の自然



出来上がったタツの編みぐるみ

そよかぜ学習

- 学習内容 体験学習 昔の道具の体験 館内見学 2階常設展示室の解説
- 受け入れ学校数 市内13校 市外1校

本年度も市内・周辺市町の小学3年生の課外授業「そよかぜ学習」の受け入れを実施しました。1階多目的室では昔の電話と昔のアイロン（火熨斗）を実際に触って体験し、2階常設展示室で、昔の職人（大工・傘職人・紺屋など）の道具の様子や、囲炉裏の役割、自在鉤・箱膳の使い方についての解説を聞いてもらいました。教科書で見た道具を実際に触ってみることで、学習への理解が深まることを願っています。



火熨斗で布のシワをのばす体験の様子

ボランティア活動紹介

郷土資料館では、文化財の整理・調査と、体験講座(郷土教室)の運営を、ボランティアさんと協働で進めています。郷土教室では、プログラムのアイデア出しや開催前の準備、当日の運営を、ボランティアさんと館職員が一緒に行っています。今回は郷土教室の運営に携わるふたつのグループの活動についてご紹介します。

昔あそびグループ

●実施日 郷土教室(毎月第1土曜日)のうち年に4回程度

昔なつかしいあそびの楽しさを伝える活動を行うグループで、郷土教室の「こどもの日体験デー」「昔のあそび」「リリアン編み」を担当しています。

5月5日のこどもの日に開催している「こどもの日体験デー」は、折り紙のこいのぼりと大きな紙でかぶれるサイズのかぶとを作る、ファミリーで大賑わいの体験教室です。ボランティアのみなさんは、工作に使うパーツの準備から、当日の折り方の指導までを行っています。

「昔のあそび」では、ブンブンゴマ作りや牛乳パックを使った竹トンボ作りを主に行っています。

「リリアン編み」は、昭和に流行したりリアン編みを毛糸で行うもので、毎年その年の干支の編みぐるみを作っています。申込者が多い大人気イベントです。干支をどうやって編むかアイデアを出し合い、試作を重ねて当日を迎えます。開始から今年で10年なので、あと2年続けて干支を一周するのが今の目標です。



伝承まなびグループ

●実施日 郷土教室(毎月第1土曜日)のうち年に4回程度 及び毎月第3金曜日(民具整理)

昔の生活や暮らしを学び、伝える活動を行うグループで、郷土教室の「古代の暮らし」「昔の暮らし」「ワラ細工」と民具整理を行っています。

楽寿園グループと合同で行う「古代の暮らし」では、火おこし・勾玉作り・実際の土器を使う土器あてクイズを行います。準備が多いため、大勢のボランティアさんが協力して開催しています。

「昔の暮らし」では、回想法(昔を思い出し、楽しかったことを振り返る心理療法)の一環として、懐かしい生活道具を見ながら、昔の思い出をおしゃべりするイベントです。いつもボランティアさんと参加者のみなさんととても話がはずみます。

「ワラ細工」は、稲わらを使い、新年の輪かざりや亀のかざりものを作るイベントです。事前にワラ細工の練習をし、すぐ使えるようにワラを整えるなどの準備を行って当日を迎えます。本物のワラに触れることのできる貴重な機会です。お子さんから年配の方まで幅広い人気があるイベントです。



刊行物のご案内

図録『三島宿へようこそ』 令和5年10月28日刊行(頒布価格1000円)

全ページフルカラーで古文書や絵図、浮世絵の図版を豊富に掲載し、三島宿の全体像を概観しています。江戸時代の三島を知る最初の一冊におすすめ。

『三島宿関係史料集』13 令和6年3月12日刊行予定(頒布価格800円)

当館が所蔵する「三島 問屋場・町役場文書」の中から、箱根石道の修繕に関する文書、巡見使の通行・止宿に関する文書、琉球使節(恩謝使)の通行・止宿に関する文書、計24点の翻刻文を収録しました。地域史研究にお役立てください。

寄贈・購入資料の紹介

●寄贈資料

令和5年6月から令和6年1月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。

寄贈者	資料名	点数
細井龍輔氏	いろはトランプ(昭和23~24年頃、文 大岡博、絵 細井繁誠)	1点
関口昌男氏	滝の本連水掛軸、富岡醒泉掛軸	2点

●購入資料

▶ ①「山中城攻め絵図」 1点

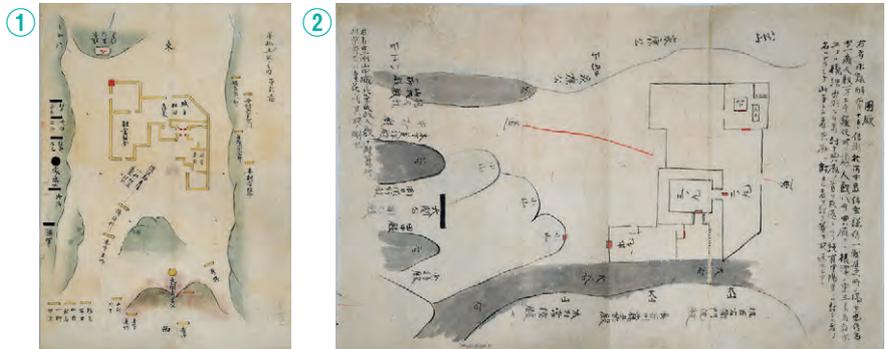
②「豆州山中城ニ北条氏政人数ヲ被籠所羽柴秀吉公責落シ給其時ノ図」 1点

江戸時代か。天正18年(1590)小田原合戦の際の山中城を囲む豊臣方の陣取および進軍経路を図示した絵図2点を購入しました。

①は右肩に「第拾五卷之内 第貳図」とあり、セットで作成された陣取図のうちの1点であることが推測されます。豊臣方の手勢だけでなく、山中城の城将・松田康長や副将・間宮康俊らの居所についても記されています。

②は墨書で、急斜面になっている

場所を「谷」として塗りつぶしており、虎口や豊臣方の経路などに朱筆を使っています。端の図跋には、永禄4年(1561)9月10日の「信州於河中島信玄謙信一戦有之時ノ備立也」とあり、川中島の第4次合戦時の図であると記されていますが、奥には「豆州山中城ニ北条氏政人数ヲ被籠所羽柴秀吉公責落シ給其時ノ図也」とあって、山中城の戦の図と記されています。城郭の配置や豊臣方の面々の配置からみても山中城の陣取図と考えられるため、奥書は後に本図を見た人が誤りに気付き、書き加えた情報であると推測されます。また、省略されている武将も多く、写した親図がすでに誤り、ヌケの多いものだったのかもしれませんが。



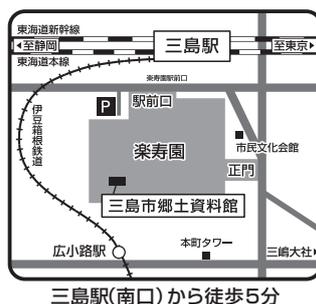
▶ 絵葉書「三島官幣大社唐門」「浅間大社境内ノ春色(駿河大宮)」 「大社境内ノ富士及神田川ノ清流(駿河大宮)」

3枚一組で「官幣大社三島神社絵葉書」と印字された袋に入っていました。が、「浅間大社境内ノ春色(駿河大宮)」と「大社境内ノ富士及神田川ノ清流」は別セットの絵葉書でした。こちらの2枚は「伏見写真館製」の印字が確認でき、富士宮市の富士山本宮浅間大社の風景を写したものです。「三島官幣大社唐門」は、現三嶋大社の神門(慶応3年(1867)造営、市指定文化財)を正面左手から撮影したカットが使われています。表面の通信文記載欄が下部1/3以内のため、明治40年(1907)~大正6年(1917)に発行されたと推定できる絵葉書です。



郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045
開館時間 午前9時~午後5時(4月~10月)
午前9時~午後4時30分(11月~3月)
休館日 毎週月曜日(祝日のときは翌平日)、
年末年始
入館料 無料(ただし楽寿園入園料として別途
300円がかかります。15歳未満は無料、
学生は学生証提示にて無料。)



郷土資料館だより

Vol.46 No.3(第137号)

発行日 令和6年3月15日(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館

発行 三島市教育委員会

E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL : https://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/

